研究課題　修理の知見を踏まえた中世真言密教聖教・紙背文書の史料学的分析―灌頂記を中心に―

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　三輪眞嗣（神奈川県立金沢文庫）

　所内共同研究者　藤原重雄・堀川康史

　所外共同研究者　稲穂将士（京都府立丹後郷土資料館）

研究の概要

（１）課題の概要

　本研究では、学界未紹介の中世真言密教聖教の翻刻と分析、画像公開を行う。対象史料は東京大学史料編纂所が所蔵する南北朝期の伝法灌頂記「桂宮院伝法灌頂記」と「薄草紙口決」断簡である。前者は他写本に乏しい未紹介史料で、丹後国の軍事情勢に関わる紙背文書が含まれる。後者は金沢文庫外の「薄草紙口決」と形態が類似しており、比較の結果次第では称名寺聖教との関係も解明し得る。本研究では両史料を翻刻した上で、内容理解に資する関連史料や比較に適した史料の調査・採訪を行い、成立過程・内容を分析し、解題を作成する。  
　本研究では、上記の作業に加えて、対象史料の修理を行い、その過程で料紙に関する現時点での標準的データを採取し、料紙研究の視角からも分析を加える。修補紙のない状態で釈文を校正するとともに、貼紙・錯簡などの原形態を検討し、史料の生成・伝来過程を探る。  
　以上の作業を経て、登録・閲覧可能な状態として修理を終え、画像のWeb公開および翻刻・解題を発表する。

（２）研究の成果

　本研究では、学界未紹介の中世真言密教聖教の翻刻と分析を行った。  
　『延文五年桂宮院伝法灌頂私記』に関しては、修理時や料紙分析等の知見をもとに錯簡を正したうえで、聖教面については寺院史を専門とする三輪が、紙背文書については室町幕府政治史を専門とする堀川が分析を進め、藤原が助言を加えた。検討の結果、本史料は真言密教寺院と律院との関わりや、真言僧と律僧が共同で行った伝法灌頂の様子、その作法次第を決定していく経緯、東寺教学における桂宮院流の位置づけなどを知るうえで興味深い史料であること、また、紙背文書には延文五年の丹後の軍事情勢について記したものがあるが、そのなかには従来は知られていない室町幕府政治史に関わる貴重な情報も含まれることを具体的に明らかにすることができた。また、紙背文書に関係する南北朝期丹後国関係史料として、京都府立丹後郷土館寄託の丹後日置氏関係史料（「田邊文書」「百鳥講文書」等）を調査・撮影した。これらの撮影史料は、Hi-CAT Plusを通じて閲覧室利用が可能となる予定である。調査にあたっては、同館学芸員の稲穂が所蔵者との調整などを行った。  
　「薄草紙口決」断簡については、検討の結果、称名寺聖教とも断定できず、詳細は今後に委ねることとし、同じく未整理史料の中に大破した『富岡八幡宮及慶珊寺縁起』を見いだし、これの修補から公開を進めた。二〇二一年度には本課題と並行して、本研究グループのメンバーを中心に金沢文庫と史料編纂所との合同で、慶珊寺所蔵『大般若経』全六百巻（智感版を含むことで著名）の撮影を完了しており、関連史料としての再評価・活用、金沢文庫での展覧会を通じた研究成果の公開が期待できる。